
飛ばされ魔王のデタラメな毎日

遊希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛ばされ魔王のデタラメな毎日

【Nコード】

N1047W

【作者名】

遊希

【あらすじ】

九条療牙は魔王になった。異世界に召喚され、あれよあれよの内に神様に能力まで授けられ、仕方なく魔王に………なった筈。ハーレム（本人にその気はない）したり、チート（どっからどうみても）を駆使したり、とにかくやりたい放題で進む、魔王リョーガの異世界生活ここに開幕。※作者の都合により、打ち切る可能性がございます。ご了承下さい。

◆001◆エセ神様（前書き）

他の二作品をほったらかしにして、この作品を開幕させたのには理由がありました。

作品の見直しが余儀なくされました。

要は、内容に詰まりました。

なので、更新をストップします（ゝーωーゝ）

といってもそれぞれに書きかけがありますが（ゝーωーゝ）

まあ、勉強の片手間の作品ですがどうぞごゆっくり（ゝ▽ゝ）

◆001◆エセ神様

俺が目を覚ますと、それはそれは白い天井が出迎えた。

恐らく、大理石で出来ているであろうこの天井を見つめながら、ふと考えた。

(……………ここ、俺んちじゃないな)

Y Y Y Y Y Y

夢に、こんなのが出てきた。

偉く質素な、キリストみみたいな格好した男。

そいつは俺を見るなり、こう言った。

「ゲラッチョ！」

「……………エ○ギア？」

よくわかんないが、誰だコイツ。知り合いの顔にこんなヤツいないよなあ。

「こんなヤツとは失礼な」

「わぁバレとるんかい」

ものの見事にバレていた。コイツ、心網使いか!?

「君はアレだ、うん」

「はい？」

どうやら俺はアレらしい。アレが何かはまるで理解出来ないが、どうやらアレらしい。

「明日から魔王ね」

「あーはいそうですかって、ええええ!？」

唐突なオッサンの一言に度肝を抜かれた。
てか、なんで魔王?!

「あーそれはアレだ、うん。気まぐれ」

「はあああっ!？ てかまずお前誰？」

「我輩は猫————」

「なわけなからうがっ」

思わず突っ込んだが、どうみても不審なヒゲオヤジにしか見えないこのオッサンが猫なわけない。

「————ではなく神だ」

「へえ？ なら神様、一つ聞きたいことがある」

「なんだ愚民？」

「愚民言うなっ！ ……なんで魔王なんだ？」

神は居住まいを正すと、右に左にウロウロ歩き始めた。

「あー、理由はいろいろあるが、簡潔に言えばこうなる。まず、魔王が死んだ。魔王には後継者が居なかった。臣下は慌てた。魔導師が提案した。『異世界の人間って強いらしいですよ』って。あとは察しの通り、召喚魔法でホイッと、ね」

「……………」

あまりの理不尽さに、思わず核分裂するかと思ったが、なんとか留まった。

まあ、いろいろあって死にたかった俺には丁度いいかもしれないが。

「んで、こっちには帰れるワケ？」

「無理」

神の即答に卒倒した。

もういいや、魔王だろうがなんだろうがやればいいんだろ。

俺はその手のオカルトは好きなんだ。オカルトだらけならむしろ歓迎ではないか。

「それで、一つ聞きたいんだけど、これは夢だよな？」

「起きたらわかる。クジヨウリョウガ九条燎牙、いや、魔王よ」

神は真剣な顔を見ると、俺に言った。

「……………がむばれ！」

「まともな言葉をつかええええつつ————」

＼＼＼＼＼＼

そんな一部始終を思い出した燎牙は、

「あー、俺はアレなのね」

と独り、呟いた。

＼＼＼＼＼＼

＼＼＼＼＼＼

城内は朝から騒がしい。

と、召喚士のクウは思った。

「まあ、騒がしくしたのも私が原因なのでしょうけど……………」

などと呟いても誰も気づかない程には忙しかった。

それもその筈。

今朝、クウ自身によって件の新魔王を召喚したからだ。

召喚したのは室内だが、まだだれも魔王を確認できるものはいない。それは、部屋自体に封印がかかっていて、魔王が目覚めなければ部屋が開かないようになっていた。

それが、先程解かれたものだから、大臣やメイド達が慌ててるのだ。でも、と置いてから、クウは思った。

（1番先に謁見する権利があるのは私なのですけどね）

召喚士には、1番先に魔王と会うことが出来る、と決められていた。それは言ってしまうととても光栄なことであり、歴史にのるような魔王になれば、その召喚士であるクウも歴史になるから、クウとしてはこの上ない嬉しさであった。

「クウ！」

と、そこでクウを呼ぶ者がいた。クウが振り返ると、やはりいつもどおりの姿がそこにいた。

「どうしたのマリエル？」

「どうしたもこうしたもないよクウ！ 早く謁見してくれてビリオール様が煩いの！」

ビリオール、という名を聞いてクウは溜息をつく。一級書記で、召喚課の課長。つまり、クウの上司である。

真面目で仕事に煩く、尚且つ見た目がハゲデブのゴブリンエースなので、召喚課の皆から（主に女性から）嫌われていた。

ちなみに、クウはハイエルフ、マリエルはハイサキュバスという種族である。

嫌な顔をしつつも急ぐクウに、横から一言。

「今回の魔王様、イケメンだといいねっ！」

「ふっ、不謹慎ですこの子っ！魔王様のお顔に評価などっ……………！」

「ははっ、相変わらずカタいねえクウはっ」

マリエルは笑いながら飛行する。勿論ハイサキュバスならではの、飛行能力である。

当然、森の種族であるエルフの上位種であるハイエルフには、翼の概念がない。

ただし、ハイエルフの脚力はサキュバス種のそれ（・・・）とは比べものにならないほど発達していて、速さで言えば互角の勝負を繰り広げ――

――る前に目的地に着いた。

開闢の間。

代々重要な召喚に使われてきた、歴史のある部屋だ。

その扉は、先程までは淡い紫の光を放っていたが、今はその光を失い、荘厳なエルラドの木の質感だけが感じられる。

その部屋の前には、大勢の重役が集まっていた。

國務大臣を始めとした様々な大臣から、メイド長や料理長などの各責任者が揃っている。

勿論、ビリオール書記長も正装して並んでいた。

クウとマリエルに気づいたビリオールが近づいてくるのを見て、クウは気づかれない程度に嫌な顔をした。

「お前は何をやっているのだ、クウ！早く謁見を始めなさい！」

「す、すみませんビリオール書記長………！」

ビリオールの言うことは最もだった。

クウは扉の前に立つ。

新しい魔王となる方に謁見するとあって、胸が高鳴るが、反面物凄い緊張を要した。

深呼吸を挟み、一言、

「これより謁見を始めます」

と言い放つと、扉を開いた。

YYYYYYYY

YYYYYYYY

しばらく大理石の天井を眺める。

それに飽きた療牙は、起き上がることにする。

まず、自分の確認からすることにした。

皮膚を見た。青く変化してたり……とかはなさそうなのでよかった。

服を見た。パジャマではないが、いつもの寝巻き姿だった。

部屋を見た。大理石で出来ていて、ところどころにミステリアスサークルみたいな、というか恐らく召喚魔法の類の陣が描かれてあった。

なにか変わった点というものは、おおよそ見つからなかった。

（あのエセ神は確か、俺が「魔王」になるとか言ってたな）

ついさっき言われた言葉を思い出した。

知らない部屋で目覚めた以上、ただの夢では済まされないだろう。

（それに、もしアレが本当ならここは異世界だ。それも下位相関でない、多分上位相関の世界）

魔王なんてシステムが存在する以上、この世界には少なくとも魔法の類が存在するかもしれない。

地球にも魔女だの錬金術だのは存在したらしい。

……まあこの目で見てない以上は適当なことなんかは言えないけどな。

不老不死だの黄金の精製だの、今の人類では不可能には到達不可能な技術がそこにあったなら、あきらかに魔法を使える人間は、そうでない人間の上位相関に相当する。

生物的には同じでも、あきらかにポテンシャルが違う。
自転車をただ漕ぐのと、ニトロエンジンをつけて漕ぐくらいには差があるということだ。

（ただの人間の俺に、そいつらの親玉なんぞ務まるわけがないだろ……）

第一、魔王が存在するなら、それこそ地球で「悪魔」と呼ばれていた者達も存在するだろう。

わかりにくけりゃ鬼でもいい。とにかくその類の、強力な魔族とやらが存在するのでは、人間の俺には出る幕すら無くなる。そうなる。

（なんで俺、召喚されたんだろ……）

当たり前の疑問だが、自然と思考がその解答に行き着く。
そんなモンがいたら、俺の存在価値などあるわけがない。

だから、根底を覆すなにかがあるはずなのだ。
人間を魔王として召喚する、大きなメリット。

そして、一つのメリットに行き着く。
それは。

「あ、そっか！　俺が厨二病患者だからか！」

そう、彼は厨二病だった。

YYYYYY

療牙が勝手に一人合点を打ったところで、声が聞こえた。

「ゲラッチヨ」

「…………エセ神様ですか」

相も変わらず変な挨拶をしてくる声の主は、先程の神様。

やはりキリストみたいな格好をしているが、先程とは違う箇所があった。

「あれ？ 神様パツキンだったか？」

「まあ、なんだ…………その、あれだ」

エセ神様はなんかいろいろ身振り手振りを頑張っていたが、やがてやめた。

「気分」

「その解答0点だろ」

まあともあれ。

療牙は神様にいくつか質問したいことがあった。

先程の疑問に関する形で、また新たな疑問が出てきていた。

「なあエセ神様」

「誰がエセだこら」

「なんで俺が召喚されたんだ？　なんかこの世界、強力な魔族的な存在いるだろうせ。だったらなんでわざわざ人間の俺なんだ？」

「うむ、いい質問だ愚民」

「愚民いうな」

「まあ、なんだ。説明するとすればこういうことになるな」

神様は語り出した。

まず、この世界に名前がないこと。この世界自体は、地球世界と同位置に存在し、同位相関としての平行世界が幾つも存在する、言わば「パラレルグループ平行世界群」の内の一つであること。

この世界には、地球世界には存在しなかったとされる、魔族の類が存在すること。人間と魔族の割合自体は4対6ほどである。

この世界には、地球世界で羨望や怨嗟の対象となり、今はなき古代の技術、ともされたが信じていた者は少なかった、「魔法」が存在する。もちろん、白や黒や赤などのカテゴリは存在せず、ただ魔法として存在するだけだが、漠然と魔法を使用する者達には、使い分け方がわかっていた。

この世界には、大陸が三つある。人間世界として、幾つもの国が競り合う大陸、「デイドス」。魔族が中心の「魔界」が存在し、四つの大国が睨み合う大陸、「オズライア」。そして、未開の地であり、「勇者」と呼ばれる者達が幾人も踏み込んでいく、古龍の棲む大陸、「シャガルディア」。

お互いの世界があまり干渉せずに、大陸内の小競り合いを繰り返してきたこと。

この国が、「アークレイド」と言う国で、先帝ロズモイ二世が倒れ、

新たな皇帝を決めなくてはならなかったこと。
そして…………。

「…………じゃあなんだ？ 地球世界の方が遥かにポテンシャルが高いから、そっちから召喚した、と」

「うむ。 あれだ、ポ○モンでも火蜥蜴をレベル100にするよりも、火龍にしてレベル100にしたほうが強くなるだろう？」

「名前隠して名前漢字にして名前の意味だけにして…………、神様だからって著作権には勝てんぞ？」

神様は、いかにも「わかってるよんなことぐらい！」と、反抗期の息子ばりに嫌な顔をした。

「でもポテンシャルが高かろうが、なにも能力なぞないんだが」

「それを今から発現させるんだよ」

そういつて神様は、トーガみたいな服の内側から、ビー玉くらいの虹色の塊を取り出した。

「…………なに、それ」

「これは「鍵」だ」

鍵、か。

玉が鍵になるとはまた厨二な。

…………俺が言えた義理じゃないが。

レストレイン
「制止」

神様はビー玉を指先でつまみ、それを上に向けると、そっと指を離した。

どういう訳か、玉は空中に制止している。

「こいつが発動すると、対象の潜在能力を開花させることができる。もちろん対象は、九条療牙、お前だ」

制止した玉は、やがてゆっくり回りだした。

次第に回転数をあげる玉は、微かな光を放ちながら、何故か膨張しつつける。

まるで、遠心力に引っ張られているかのような形で、ドーム状へと広がりつつける。

「と、まあこのくらいかな」

神様が眩くと、回転がピタと止まる。

そして、膨張も止まった。

「それじゃ始めるけど、大丈夫かな？」

「あ、ああ」

神様はドームの天井部分、つまりてっぺんに向かって、指を鳴らしながら眩いた。

ドローアウト
「開花」

瞬間、ドームが療牙を中心に、キュツと小さくなっていき、やがて縮みながら療牙の中へ消えた。

その瞬間。

療牙は脈動を感じた。

何か血が沸き立つような。

人で無くなるような。

それでいて、頭だけは急速に冷えていった。
頭が冴え渡る。

「ほお……………」

「……………神様、結局俺の能力はなんだ？」

神様が感心したような声を上げたのに気づき、療牙が答えをせがむ。
それに対する、神様の答えは。

「続きはWEBで！」

「はよ答えろや」

YYYYYYYY

「は？ 二つあんの？」

「うむ、本来は一つしか持てない筈だったんだがな」

神様曰く、何故か二つも能力ついてしまった。
二つ発現することは、軌跡に近いらしい。

まあ二つあっても害はないとのこと。

「一つ目は、「^{ゼネラル}全知」だ」

「なんすかそれ」

「うむ。要すれば、「思い浮かべた事象を、わかりやすいイメージとくつつけて、それを無理矢理魔法として発現させる」能力、になるかな」

療牙の頭上に、いくつもの？マークが浮かんた。
わけわからん。

「どゆこと？」

「まあ……ようは、雨をが降らせたい課長。しかし今日は晴れていた」

「課長？　なぜ課長？」

「そんなときは、まず雨を思い浮かべる。それから、雨が降ってるイメージがしやすい言葉を選び、あとは右手が勝手に動いて構成された魔法陣に対して、イメージしやすい言葉を詠唱すればOK」

「無視かい」

なんか試してみ？と神様が言うから、やってみることに。
とりあえず、指先からライターみたいな小さな火を燈そうとしてみることにした。

まず、ライターの火を想像した。

次に、詠唱する、イメージしやすい名前だが、「ライター」でいいと思った。

「ライター！」

真上に伸ばした指から、ポツと吹き出した小さな火。
だが、それは療牙が既に人外である証拠でもあった。

◆001◆エセ神様（後書き）

更新は不定期です。
悪しからず。

◆002◆魔法と指輪と謁見（前書き）

や、一ヶ月ぶりくらいの投稿ですね（・・D・・）

文化祭やら体育祭やら夏休みの課題（負の遺産W）を片付けており
ましたら、時間があれよあれよと……………（涙）

まあ、今回もgdgdですけど、ヨロシクお願いします。（。|。。）

v

◆002◆魔法と指輪と謁見

「んで、二つ目は？」

ライターの火を指へ点したまま、療牙は問うた。
場所は依然として大理石みたいな物で出来てる部屋。

「二つ目は、ダークマター「暗黒」というみたいだな」

「みたい、とは？」

話相手は、相変わらずキリストみたいなオジサン。
自称神様である。

神様は何か悩んでいるような、うーん、というような唸りをあげていた。

「それが、使用する魔法総てに闇の属性を付加するってやつなんだけど………」

「闇属性？」

神様は頷く。

魔王だし、闇属性ぐらい付加されたところで特に問題はないんじゃないか、と療牙は考えていた。

「問題は、魔王なのに何故今更闇属性を付加しなければいけないの

かつて所なんだよなあ……………」

…………俺の素朴な予想は、見事に疑問へと昇華した。

（まあ、確かに一理あるな）

魔王ならば、闇属性を使えないのはおかしい。

だからといって、闇属性を付加しないと使えないようなやつが魔王にはなれないかといえば、そうではないだろう。
ないだろうが…………。

「まあ、この能力に関しては、ほぼなにも説明はないかな」

「そうすか」

神様は一息ついた。

その瞬間、今まで聞こえなかった喧騒が外から聞こえてきた。
まるで、聞こえないように（…………）されていたかのよう
うに。

「外が騒がしくなってきたことだし、少し急ぐでしょう」

「魔族が集まってるのか？」

「まあそうなるな」

神様は鷹揚に頷いた。

そんなことより、と神様。

「次は魔法の基礎の話でもしようかな」

「ああ、頼む」

「……魔法は、さっき使っただろうからわかると思うけど、魔法陣と魔法の詠唱が必要なんだ」

「よくある魔力云々は？」

「MPみたいなモノだと考えれば大丈夫だ」

「それで、魔法陣と詠唱がなんだって？」

「それで、基礎だけ教えておくと、その二つともが既存の魔法には必要な技術になっているんだ」

「そりゃさっきも言ったな」

「だけど、ここからが重要なんだ。この二つの内、魔法陣の方には既存の魔法のものを改良してしまうことが出来るのさ」

「……………」

「つまり、君の出す、見たこともない魔法陣だって改良されてしまうということなんだ」

療牙にはイマイチ意味が理解できない。

というのも、なぜそれが問題なのかわからないからだ。

国力増強に一役買うのではないだろうか。

「療牙、では聞くが。それが敵に知れ渡れば脅威にならないか？」

「……………アンチスベル 対抗魔法か」

アンチスベル 対抗魔法は、相手の放つ魔法に対しての、打ち消しの効果を持つ魔法のことである。

神様は、療牙がそれを知っていたことに驚いていたようだが、厨二病の療牙からすれば当然の知識だった。

「そう。だからこそ、自国の知識として隠さなければならないし、それが療牙独自の魔法ともなれば味方からも隠さなければならない」

「誰が敵になるかはわからない、か……………」

療牙は、概ね（・・・）納得した。

だが、肝心のどうやって知られないよう隠すのかを聞いていない。

「で、神様とやら」

「神様だ」

「どうやって魔法陣隠すねんな？」

なんだそんなことかかと思ってんだろっうなあ、神様。

「なぜばれた？」

「……………サイコスキヤニング 脳内解析かよ」

「はっはっは」

Y Y Y Y Y Y

「まあ、あれだ。それは凄く簡単なことでいいんだ」

「簡単なら早く言えばいいのに」

療牙はわざと聞こえるように言ってみるが、神様は平然としている。
やはりメンタルは強いか。

「で、どうやんだよ？」

「つまり——」

「——魔法陣構築しなきゃいいじゃん」

「ああー、っていやそれちょっと待て！」

療牙は頷きかけたことを少し反省しつつ、神様に食ってかかった。

「魔法陣作んなきゃ魔法発動しないじゃん　！意味ねえじゃんか！」

「いやあ、だってさっき言ったのは基礎の話だよ？」

神様はやれやれとばかりに療牙を見ながら話を続けた。

「魔法陣を構築しないで魔法を発動できる奴は、おそらくこの世界にはいない。それは、この技術がまだ知られてないからだよ」

神様はつづける。

「加えて、魔法陣が描けないんじゃ、魔法の劣化複製は無理に近い」
「なるほどな」

「そういうことさ」

さて、と一息つく。
神様は療牙に向き直る。

「魔法陣を書かない、『無陣魔法』の方法だが。魔法の詠唱時に、魔法陣の形をイメージをするんだ」

「イメージ……、それだけでいいのか？」

「頭の中で魔法陣を完成させれば、それを見る方法は脳内解析のみになるんだよ」

「イメージ、ねえ」

さつき見た、「ライター」の魔法陣を思い出す。
確か、あんな感じ……………？

「ライター！」

ボウという音とともに、指先に火が灯る。
療牙は、その火を眺めながら呟いた。

「なるほどねえ」

ちょっと待て。

療牙は疑問に思った。

「神様。今のは上手く行き過ぎ……………」じゃないか？」

「どういうことかな？」

「あんな鮮明に……………」思い出せるかよ、見たばかりの物を」

「確かに……………」いや、ああそうか」

神様は納得しかけて、急に一人合点を打ちはじめた。
何だというのだろうか。

「どういうことだ？」

「さつき、ダークマター「暗黒」について説明したよな？」

「あの、闇属性自動付加だったかなんかか？」

「あれの本当の効果は、どうやら」一度見た魔法陣を絶対に記憶し、鮮明に思い出す” ことにあるらしい」

らしいってなんやねん、と思わず心の中で突っ込んでしまったが、

「これなんというチート属性………」

Y Y Y Y Y Y

「まあ、これで魔法については大丈夫だろう」

神様が魔法についての講義を終えたその頃には、外は静まりかえっていた。

あの喧騒が嘘のように止んだ。

その事実には神は。

「ふむ、そろそろ謁見が始まるな」

「謁見？ 誰に？」

「お前にだぞ？」

俺！？と燎牙は驚く。

魔王であることを忘れてはいまいか。

「お前は魔王ジャマイカ」

「そーゆースラングを神様が使うなよ」

「いやん差別よっ！」

「はいはいそーですかっ」と

神様の言葉を受け流しつつ、療牙は扉を見遣った。

ざわつきが止んで、確かに何か始まりそうな気がする。

療牙は神様に向き直る。

「なあ神様。時々助言してくんね？」

「……………いいだろう。これを嵌めておくといい」

そういつて、黒い指輪を渡してきた。

材質が何かはわからないが、ごてごてした装飾もなく、ただしトライバルみたいな紋様が彫ってあるのみのシンプルな指輪。

「これは？」

「我輩のカケラ、だな」

「カケラときたか……………」

療牙は神様のカケラを、右の中指に嵌めてみた。

どうにもブカブカで、指から抜けないどころか手を振れば飛んでいきそうだ。

「コレすごいブカブカだぞ？」

「まあじきにわかる」

療牙の疑問に対する神様の答えは、とても曖昧だった。
神様は何か唱える。

それも、聞き取れないレベルの音量で唱えられた、長い詠唱。

そして、

「なにを……っうお!？」

療牙の手元にも変化が。

とてもブカブカだった指輪が、いつの間にか指から離れなくなるサ
イズにまで小さくなっていた。

「ってコレとれねえじゃん!」

「別に大丈夫だろう。ソレは絶対錆びないし傷つかないし不意に抜
けないし」

「まあ……ならいいか」

療牙は仕方なく顔をあげた。

が、そこには既に神様の姿はなく。

声は、

「どうした? 我輩はココだぞ?」

指輪から聞こえてきた。

YYYYYYYY

クウが重たい扉を開くと、正面に台座が見えた。

代々召喚者を降ろす場所に使われる、座標としての台座。

その下には、座標を定め、召喚をより行いやすくするための、召喚陣。

部屋自体は大理石で出来ており、本来ならその大理石の台座だけが見えるはずだった。

台座には今、誰かがいた。

黒い髪に黒い瞳。

見たことも無い服を着ているその人間は、台座に腰掛けていた。

あれが、次期魔王様。

そう思うクウの胸は高鳴っていた。

次期魔王は、やや驚いた表情を浮かべていたが、それでもなぜか落ち着いていた。

まるで、謁見を予め（・・・）知っていて、しかも謁見に来るのが人間ではないと予め（・・・）知っていたかのような振る舞い。

それが、知らず知らずクウに期待させていた。

台座へ歩み寄る。

台座まではそう遠くなく、クウは次期魔王の前で、跪づいた。

そして、

「ようこそアークレイドへ、魔王様」

謁見した。

Y Y Y Y Y Y

「ようこそアークレイドへ、魔王様」

扉を開くなり、歩み寄ってきて跪づいた少女(?)に、そんなことを言われた。

療牙自身にとって、そんな経験はこれまでの人生で一度だってなかったし、これからも無いだろう、考えるまでもないことだと思っていたことが。

まさに目の前で一瞬の内に行われた。

(よくあるトリップモノだと、こんな時どんな感じだったかな………
…)

療牙は召喚された事情を、少なからず知っていたが、それはあえて伏せることにした。

というか、自分の能力の都合上、そう易々とこれまでのことを話すわけにもいかなかった。

なので。

「……………これは夢か？」

白々しく、イマイチ事情が飲み込めていない感じを出した。

寝ていたのだから、妥当と言えば妥当。

それに対し、目の前の巫女さん衣装の(耳がやたら長い)少女が言う。

「いえ、現実です。やはり事情が飲み込めてらっしゃらないようですね」

「当たり前だ、つーかなんだココ、そしてお前は誰だ？」

白々しい挙動不審さである。

如何にも事情知ってますよとも言いたいみたいだ。

しかし、そんな白々しさには巫女さん少女は気付かないのか、

「ここは大陸オズライアにあるアークレイド帝国という国、その王宮ラザス城です。そして私は召喚士のクウといいます」

跪びたまま、そう述べた。

更に白を切ることにはしうか。

そうになると、あとがやっかいなんだがなあ、この巫女さん少女の反応が気になるなあ。

とか思いつつ、

「オズライア？ 聞いたことないし、大体何故俺はこんなところにいるんだ？」

結局またもや白々しさが目立つ返答に。

そもそもこの時点で落ち着いているのがおかしい、と気づくべきであるが、この少女は気づかないみたいだ。

療牙が落ち着いているのは、事前情報があったのと、地球世界で彼は古流武術を習っていたおかげなのだ。

「ここがあなた様の世界とは違う世界だからです。私が召喚させていただきました」

さらに続ける。

「あなた様に、我々の国の王になっていただきたいのです」

あまりにも、セオリー（・・・）な解答に療牙は。

「……………また随分と、勝手な理由だな」

困り顔をしてみせたが、内心では笑っていた。
あまりにも、よくある召喚モノすぎて笑えてきたのだ。

「勝手なのは重々承知の上で申し上げております」

巫女さん少女が頭を低くした。
跪づいて、さらに頭を低くするなど凄い芸当だ、などと変に感心してしまった。

よく見ると、巫女さん少女が開いた扉の向こう側には、なんだか体が赤いやつとか青いやつとか、また翼が生えてたり顔が蜥蜴だったり。

その辺ですら王道すぎて笑えてくる。

「……………お前が俺を召喚したんだよな？」

「はい、それが何か？」

「今すぐ元の世界へ帰せ」

半ば脅迫っぽくなるが、妥当なのではないか。
ましてや魔王になるような器を考えれば、少し攻撃的に話しても大丈夫であろう。

これには巫女さん少女も困ったらしく、若干の焦りが見えた。

「申し訳ありません、それは無理です……………」

「何故？」

「それは……、そういう仕組みだから、としか表現できません。召喚した対象は、この世界から出られなくなるという、よくわからないチカラが働いているようで……」

巫女さん少女の申し訳なさ度が上がってきたところで、療牙は考えた。

ま、そろそろいいか。

「……………はあ、なんだよソレ。で、俺はどうすりゃいいんだ？」

少女の顔が少し元気を取り戻す。

後ろの奴らがザワザワしてたが、とりあえず無視した。

「今日のところは、お疲れでしょうから、休まれてはどうでしょうか？」

「なぜに提案？」

「あつ、失礼しました!」

そういつて、顔を赤くする巫女さん少女。
この子なかなか可愛いなー。

ま、それはともかく。

「………一人部屋だろうな?」

「あ、はい! 前魔王様のお部屋でございます。とりあえず今日は
そちらに――」

「なら案内してくれ」

そういつて立ち上がる。

途端に、目線の位置が変わる。

少女――、クウと言ったか。

身長150センチくらいだろう、随分小柄な少女だ。
クウは、療牙を見上げ。

「案内させていただきます」

と、言った。

入口の奴らは、もう居なかった。

Y Y Y Y Y Y

Y Y Y Y Y Y

クウが謁見を行っている間、外の連中——大臣たちは、ずっと黙っていた。

かのように見えたが、マリエルとその上司、ビリオールは、サイコパス念話の魔法を使い、会話をしていた。

『ビリオール様、ビリオール様』

『……!?!? こんな時に何だ?』

『今度の魔王サマ、どうですかね?』

『どうって、どういうことだ?』

『我々魔族が、魔王としての人間に仕えるんです。我々に対して、理解とか仁義とかそういうのがある方なんでしょうかね?』

『知らん。ただ、我輩が見る限りは——』

『期待は、出来そうだ』

『それは、楽しみです』

『ああ……、む。魔王様は退出のようだ。今日のところは謁見は無しだな』

『ええーッ!?!?』

『つべこべ言うな！ 我輩とて一度は謁見して起きたかったわ！！』

そう言い放って、ビリオールは召喚課のあるほうへ歩いていった。

残ったマリエルは、やや困り顔で呟いて、立ち去った。

「期待は出来そうだ、か」

◆002◆魔法と指輪と謁見（後書き）

更新は不定期になります（・ω・、）

最近ログホラよんだらRPGがやりたくなって、、

なんかいいのありませんかね？

さて次回予告↑

◆003◆（仮）魔王の自覚

お楽しみに！

◆003◆私室と夜闇（前書き）

えー。

ストックがまともに書けてないまま出すのは本来不本意なんですが……

明日から大会&来週からテストなんで、ちょっと間を持たせる為に三話を投下します。

というわけで、遊希です。

最近涼しいです。

度重なるアニメとラノベの奔流に、まともに次話も書けませんww

ともあれ。

まずは第三話をどうぞー

◆003◆私室と夜闇

超巨大で、見るからに柔らかそうなベッドを始めとする、絢爛豪華な調度品の数々。

壁には、なにかの（おそらく城下街と思われる）風景画。その壁もまた豪華の一言。

そんな部屋に、療牙はややげんなりとした。

ここは、先程の大理石でできた部屋から移動してきた、「魔王の部屋」である。

魔王なんだから部屋が広いのは当たり前だとは思うのだが、こうもぴかぴかとしているとどうも落ち着かない。

質屋に出したらとんでもない額になりそうだなあ、などと呑気に考えていると。

「――ほかに困ったことがあれば、部屋の外の衛兵にでも………魔王様？」

「え、あ、ああ」

ここまで案内をしてくれた、侍女の声で我に返った。

先程の、クウという少女とは色々な意味で違うこの侍女は、ナルフェルと名乗った。

金髪翠眼、眼帯をしていて、多少は異なるようだが、服装はやはりメイド服のようだ。

（あれ、地球の文化だよな……。なんでこんな異世界にまで広がってるんだ？）

ここへ来て、最大の疑問が持ち上がる。

―そもそもなんで異世界の奴らが、日本語で会話してるのか―という簡単な疑問だが、あまりに自然すぎて気づかなかったのもまた事実だ。

よく考えれば、服装だってそうだ。

なぜ巫女さんがいるのか、そもそも気にならなかったのはなぜなんだろうか。

突然のことだったし、流れがあまりにも早くて考える暇が無かったことが原因なのだろう。

「……………どうかなさいましたか？」

ナルフェルが、心配そうに聞いた。

説明をぼーっとシカトし続ければ、確かに心配の一つや二つはされるだろう。

「い、いや大丈夫だ。少し考え事をしていた」

「……………もう一度ご説明いたしましょうか？」

「あ、ああ。頼むっ」

畏まりました、とナルフェルは頷き、咳ばらいをする。

「…この部屋は、先帝ロズモイ二世様が使われていた私室でござい

ます。リョーガ様の私室になりますね」

「前の魔王の部屋か。この部屋は最初からこうなのか？」

「いえ、部屋のデザインは全て魔王様のお好きなように変えさせて
いただいております。ロズモイ様は絢爛豪華を好みましたので」

なるほど。

なら、もっと普通に変えてしまうか。

だが、その前にやるべきことがあると思った。

「ありがとう、続けてくれ」

「はい。とりあえずは、こちらでお休みになられて下さい。ほかに
なにか困ったことがございましたら、部屋の外の衛兵にでも申し付
けて下さい」

「ああ、わかった」

さつき廊下を歩いてきて、今が夜だとわかった。

ちょうど城下街の方角の窓だったのか、ぽつぽつと明かりが見えた。
もちろん日本のネオンとは比べるべくもないが。

つまりは夜中の時間帯だ。

そんな時間まで神と対談してたのか俺は。

「失礼しました、お休みなさいませ魔王様」

こんな挨拶とともに、ナルフェルは扉から出て行った。

YYYYYY

とりあえずベッドに腰を下ろしてみる。

部屋が天井のシャンデリアらしきもののお陰で明るいので、眠る気にもなれないのだ。

しかし、アレどうやって光っているのだろうか。

電気なぞあるわけ無いだろうし、やはり魔法だろうか。

『アレか？　アレは雷魔法の呪符で光らせているんだろうな、おそらく』

「うわっ!？」

急に聞き覚えのある声が聞こえ、療牙は思わず驚いた。

しかし、部屋を見渡してもその声の主は見当たらなかった。

『たわけ！　我輩は指輪だと言っただろ！　…………声に出さなくて
も伝わるぞ』

『ん、こういうことか？』

『ああ、そうだ。やればできるではないかまったく』

『…………』

療牙は右手中指を見た。

昼間、自分が「助言して欲しい」と頼み、神が嵌めた黒色の指輪。
けして豪華ではないが、確かな質感がある、『神の半身』。

『まあそれはさておき、どうだ？　初魔王の気分は？』

『どうって、まだ何もしていないし。………実感だってわかねえよ』

実際に今日やったことはといえば、起きて神と会話して魔法使って裏技使って巫女さんと話をして部屋で説明を聞いたただけだ。

こんなもの、魔王の実感がわくわけがない。

『そうか。………明日から忙しくなるだろう』

『ああ。………そういえば、なんでいきなり夜だったんだ？』

『んん？』

かなり疑問だったことがある。

療牙には、起きた時間と今の時間の差がどうしても埋められないでいた。

古流武術を毎日習っていた（習っていた理由は、父が師範だったからだ）療牙の体内時計はわりと正確で、起きたときには、ちょうど8時間寝たという感覚があった。

その前の晩の寝た時間は、深夜0時だったので、朝8時に起きたことになる。

すると、どうしても時間が合わないのだ。

今はどう見ても、夜の10時を回っているだろうと療牙は、窓の外を見て思う。

では空白の数時間、療牙は何をしていたのであろうか。

『そんなの、我輩が時間操作したからに決まっているだろう』

『時間操作？』

『この世界の時間そのものを圧縮したんだ。そのほうが都合がいい

からな』

『……………』

呆れて言葉が出なかった。
無茶苦茶だこの神様。

『褒めないでくれ、照れるだろ?』

『褒めてねえよ……………』

『はっはっは』

俺はコイツに一生勝てる気がしない。
屁理屈と傍若無人さだけは。

『……………とにかく、今日は早く寝たほうがいいか。魔王に就任するとなれば、色々手続きとかあるだろうしな』

『まあその辺は明日にでも、さっきの巫女が話すだろう』

『クウが?』

うむ、と自称神様。
もう自称でもなんでもないのだが、未だにエセっばさがたっぷりなので、イメージとしては自称だった。

『ネタバレしておく、あの巫女はお前の直属の部下になるぞ』

『召喚士、だったっけ?』

『そうだ。召喚士は本来、召喚課という部署で働いている』

『召喚課？』

『召喚士で構成されている部署だ。大規模召喚魔法なんかを行ったり、単に召喚獣の召喚を行ったりする』

『なら部下にはならんだろ。召喚士としての仕事があるだろうしな』

それがそうでもないのだよ、と自称神様。

相変わらずぐちゃぐちゃな話し方をする神様である。

『召喚課の召喚士の役目として、今回追加されたのは………といっても今回だけだろうが、な』

『なんなんだ？』

『魔王を無事召喚した者に、魔王直属の政務官になる権利が与えられたんだよ』

『なるほど。政務官ねえ』

政務官とは、まあ要するに魔王の治世のサポートだろうと推測した。というか多分そんなもんだろ。

『まあそうだな。だが——』

『？』

『魔王の側近になる、ということは、その者の位が跳ね上がることを意味するんだよ』

『……………つまり、出世か？』

『まあそうなるな』

……………なんともまあ。

俺は出世の道具だったわけだ。

根本的な理由は違うからまあ我慢出来るけど、出世を餌にするとは情けないな。

クウという召喚士が、出世欲が強い奴かは知らないが、結果的に俺の子は俺の側近になるわけだ。

『なんだかなあ、事情を知ると複雑な気分になるな』

『わからんでもないが、事実だそれが』

どうしたものだろうか。

どうするもこうするも別にないのだが。

『我輩から提案があるぞ、悩める若人よ』

『じじいかよ……………』

『む、失礼な。まだ我輩は328653772歳だぞ！』

『……………』

『ああそうだ我輩はじじいだっ。何かいけないのか？』

『いや、なんもないですハイ』

『……………まったくこれだから最近の若い奴はっ』

白々しくキレて白々しく落ち着いた、こういう風にしか表現できないくらい淡々と言われると、なかなか困る。

『……………で、提案というのはな』

『あ、ああ』

『寝たらよかろう!』

『最初からそうするつもりだったよっ!!』

まったく、何が『これだから最近の若い奴は』だ。

『聞いて損したわ全く……………』

『まあまあ』

『……………寝るわ』

そういつて、ベッドに倒れこんだ。
だが、またしても問題が。

「照明どうやって消すんだろうか……………」

『テーブルの上に呪符があるだろ? それを軽く二回叩けば消える』

仕組みだ』

「そりゃどうも」

Y Y Y Y Y Y

闇の中、療牙は考えた。

訳がわからないし理不尽だが、確かにやらなくてはいけないことがあるからこそ、召喚されたのだろう。

（とはいっても、気持ちの整理がつかねえよなあー）

家族や友人に別れも告げぬままの旅立ちである。

今頃、居なくなった自分を探し回ってるのではないか、と療牙は心配していた。

（もしそうだったら、すっげえ申し訳ないな……）

いくら自分から居なくなった訳ではないとはいえ、やはり失踪したら探すのが普通の親である。

未練なんか無いし、とはいったものの、帰れないと知ると色々思うところがある。

（ま、考えてもしゃーねーかあ……）

それよりこれから考えなくちゃなあ。

まずは明日起きてからだな、そう決め込むと、意識が遠くなっていた。

Y Y Y Y Y Y

Y Y Y Y Y Y

召喚士専用寮の一室。

そこにクウはいた。

事務用の、というか自分用の机に向かいながら、何かを読んでいた。

「なーにしてんのクウ？」

「っ!？」

かなり集中していたため、後ろから声をかけられて驚く。

振り返れば、いつもの顔がそこにあった。

「ま、マリエル！ 脅かさないでよ！」

「ははっ、悪い悪いっ！」

ハイサキュバスで、同僚で、学生時代からの悪友でもあるマリエルは、微塵も悪いとは思ってなさそうな顔をしながら笑う。

いつもそうだった。

昔っからこの、屈託の無い笑顔を向けてくるマリエルを、クウは親友だと思っていた。

なにか疑いがあったわけでは無かったが、単に気になって聞いてみれば。

― 実際、親友だとも。

そんな風に返された。

「で、真面目なクウちゃんは何をよんでいたのかな？」

「え、あ、コレ？」

マリエルが、右肩から覗き込むようにして聞く。
クウが読んでいたのは、

「コレは魔導書よ」

「へえ、なんでまた？」

すごく不思議そうに聞かれた。
当然といえば当然だ。

クウやマリエルは「召喚士」だが、それ以前に「魔導士」である。
魔導士は、魔法を使う職業の基本。

召喚士になるためには魔導士でなくてはならないため、二人とも一般的魔法なら一通り使いこなせるのだ。

魔導書とは、魔法の書き記された書物を指し、様々な魔法が記録されている。

もちろん、読んだだけで使えるわけではなく、しっかり練習しなくてはならないが。

だからこそ、マリエルには不思議でなかった。

「……………明日から魔王様を、リョーガ様を間近で護衛する立場になるし、そんな奴が基本も使えなかったなんて恥ずかしいから復習してたのよ」

「魔王様はリョーガ様っていうの？」

あ、しまった！ とクウが漏らしたところには、マリエルは「リョーガ様かぁ……………」などと呟いていた。

クウは謁見の後に、名前を聞かされていたが、本来は明日の戴冠式までは名前は内緒である。

思わぬうつかりをしてしまい、頭を抱えるクウ。

「別に誰にも言わないわよ、全く。クウは少し考えすぎよ」

「あう……………」

「魔法だって私より使えるんだから大丈夫よ。それに……………」

「？」

「ニンゲンのリョーガ様は、私達とは潜在能力が違うんでしょ？」

「え、ええ」

マリエルがいうとおり、クウ達と、異世界から来たリョーガとではもともとの潜在能力が桁違いだった。これはどうも、世界の優劣が存在することに起因するらしく、その差は数百倍と言われている。

「数百倍も違えば、古龍種だって滅ぼせるわよ」

「まあね……………」

実際、リョーガが戦える存在なら、護る筈のクウが逆に護られることになるだろう。

魔法を教えれば、その存在はさらに強くなるだろう。
そうなった時、クウの存在意義は。

「あまりないのよねー」

「ろ、露骨に言わないでよ……」

こればかりは仕方がないが、諦めきれない。
せっかく側近になるのだから、頼ってもらえる存在でありたい、
と思う。

「まあ、せめてサポートでもできれば、なんてね」

「ふうん」

マリエルは、なんだか納得していないような顔をしていた。
が、「ま、夜更かししすぎんなよー美容の大敵よー」などといいな
がら、二段ベッドの下段に入っていた。

クウは、そんな同僚兼親友の様子に苦笑しながら、魔導書へと顔を
戻した。

YYYYYYYY

YYYYYYYY

「……時魔法、か？」

巨大な闇の中で、ソイツはのそりと顔を上げた。

「この世界でそんな無粋なモノを使うのは、まあ奴しか居らぬわな」

辺りを見回して、今が夜だということを悟る。
煩わしげに欠伸をすると、眠りについた。

「余計なマネをしなければよいのだがな……………」

◆003◆私室と夜闇（後書き）

えー。

文章、雑魚いね。

構想、粕いね。

設定、浅いね。

敬語、わからんね。

いつもの話ならハイスピードで一日が過ぎるところを、この話では引きずります。

なるべく長く書きたいものでして、軽快なのもいいとは思うのですが……どうですかね？

感想なんかでそこら辺を教えていただけたら幸い、と思います。

では次回予告。

療「あー、今回から次回予告させていただきます、九条療牙です」

作「とりあえずお前だけな？」

療「まあ飛ばされたばかりだしな………」

神「我輩がおるだろう粕作者ッ！」

粕「なっ、粕とはなんだ粕とは！　って、名前も粕に変わってるし！？」

神「粕だからな」

療「さ、さて次回はー」

神「療牙が「魔王リョーガ」として、戴冠式に出るぞ」

療「冠ないからただの即位式だけどなw」

神「そして魔王として、よーやく働き出す怠け者」

療「別に怠けてはいねーよ!」

神「そしてそしてそこへ突如として現れる粕作者!」

粕「や、でないから」

神「次回、「餃子はチャオズと読むんですよ!」の巻!」

粕「お前帰れ!」

療「お、お楽しみに〜…」

◆004◆厨二魔王と即位式（前書き）

あー、大変お待たせしました（、ーωー、）

というかですね、テスト期間うざかったですねええはい。

某ぐりいの某竜を集めるゲームの餌食になってまともにテスト勉強出来ませんでしたええはい。

さておき。

そんなわけでなかなか書けず、また即位式についての知識が乏し過ぎて作業が難航していました。

出来上がりは、まあよくはなったかなとは思うものの………。
駄作感丸出しですね。

そんなわけでひとまずどうぞー。

◆004◆厨二魔王と即位式

夢の中に、変な奴が現れた。

見たことあるような、ないような、さっきまで見ていたような、会話をしていたような。

「ゲラッチヨ」

「おう、ゲラッチヨゲラッチヨ」

やっぱり見たことあるし、話をしたこともあった。

「で、今度はなんだよ自称神様？」

「自称ちゃうわ！」

エセ神様は、どう聞いてもエセ関西弁にしか聞こえない喋り方で否定した。こんなだからエセとか自称とか療牙と呼ばれるのだが、気づいていないのか受け流してるのか。

「……………起きたら戴冠式だぞ、九条療牙」

「戴冠式って何をするんだ？　よく知らないんだけど」

「ああ、説明してやろう」

と言っても明日また説明を受けるだろうがな、とぼやく神様。

「療牙の住んでいた地球では、主に中世ヨーロッパで行われていた、いわば即位式のようなものだ」

「成る程、俺が魔王になる為の儀式のようなモンなんだな」

「そんなところだ。本来なら、高僧や神官が皇帝などに冠を被せることで完了する儀式だが、この世界では少し違う」

「？」

「まず、魔王は冠を被らないから、冠は使わない。無駄だからというわけではなく、単にそういった概念が無いんだ」

「じゃあ、なんで『戴冠式』って言ってるんだ？」

矛盾もいいところである。

『冠』がないのに『戴冠』とは、笑い話にもならない。

「よくわからんが、かなり昔からこの『戴冠式』ってことばがあるようだ。大方、中世ヨーロッパの王でも召喚したのだろうな」

「ちょっと待った」

ここで、療牙はかねてからの疑問を思い出した。

『日本でもないのに日本語が通じる理由』、である。

メイド服など、どう考えても地球の文化だ。

「ここは異世界なのに、なんで日本の文化が存在したり日本語が通じたりするんだ？」

「ああ、それはあれだ。『平行世界における相当文化言語』という仕組みだな」

「……………はい？」

全くもって意味不明かつ不明瞭である。
相当文化言語ってなんね一体。

「まあカンタンに言えば、『日本語』という言語は、どの平行世界にも必ず存在するというとき。名前は違えど仕組みは同じ言語。だから、日本語が通じるんだよ」

「無茶苦茶だなあオイ」

「当たり前だ、その方が管理がカンタンだからな」

基準そこかよ、とか思ったりしたが、あえて言わなかった。
言わなかった理由は、

「全～部聞こえとるよ！」

神様の空間なんだから、別に喋んなくても聞こえるんだな……………。
てか、コレもはやプライバシーとか関係ないな。
神様、あなたただけ傍らに人無きが若し。

「傍若無人といえ傍若無人と」

「ま、まあまあ！」

さておき。

「じゃあなんで、『メイドさん』とか『戴冠式』とか、ヨーロッパの言葉が伝わってるんだ？」

「…………ワカンネ」

「だからまともに喋れよ」

「コレ我輩のまともだから」

「…………まあいいや」

早々に諦めた。

恐らく説得するだけ無駄だし、そもそも利益がなかった。

「我輩の喋り方如何で変わる利益ってなんだよ」

「さあな」

YYYYYY

日の光を感じ、療牙が起きたのは、腹時計でいえば大体朝の6時前だ。

大きな窓の、大きなカーテンから漏れる光は、暖かった。

起き上がると、ベッドの脇に置いてある靴を履き、窓に近寄った。カーテンの隙間から、昨晚には見られなかった、アークレイド帝国の景色を見ることが出来た。

一言で言えば、雄大。

「…………ツ」

仕事があつてか起き出してきた人が見える城下街。巨大な門の向こうには、整備されている道と、豊かな緑の森。遥か彼方には天を衝くような山々が広がり、悠然と聳えている。

（こんな巨大で雄大な国を、俺が……………？）

その事実には、療牙は少し不安になる。

実際、ほんの一昨日まではただの高校生だったのが、すぐに魔王をやって下さいなどと言われても、やるしかない状況だったとしても。

「それは……………どうなんだろう……………」

普通なら「ええわかりましたやります」とはいかない。
当然、戸惑いが隠せないだろう。

無論、療牙が落ち着いてるのかと言われれば、この通り不安だけである。

だが、目の前に在るのは事実で、その事実の前に今立たされているのだ。

この雄大な自然も、あの机の呪符も。

昨日出会ったナルフェルやクウやエセ神様も。

全てが事実で、それらは現在進行形なのである。

「……………」

だったら、療牙がとれる行動はもう一つしかないのである。
則ち、

「……………魔王、やるしかねえか」

幸いというか。

療牙自身はオカルト好きだし、厨二万歳だし、魔法ワッショイだ。
エセ神様がくれた能力だって使いこなす自信もある。

「そういや、どーやって使うんだっけ、魔法」

ふと思い返し、頭で『ライター』の魔法を思い浮かべる。

ライターってダサイよなあ、などと考えつつ、『ダークライター暗黒』の絶対記憶能力により忘れることのない、ライターの魔法陣を頭に描く。

二重丸に重なる六芒星。

一般的な魔法陣に似た、割とカンタンな魔法。

「ライター」

そして詠唱。

右の人差し指の先に、小さな火が燈された。
ここまですぐ発動手順。

「ライター、ってなんかだせえよなあ」

燈った火を見つつ、ぼんやりと考える。

大体、ライターって使い道あんま無いし、魔王が使うの魔法にしては余りにもインパクトに欠けていると思う。

…ん、インパクト？

「んー、インパクトか」

そういや、エセ神様は相当文化とか言っていたが、インパクトとかは英語だからわからないよな。

だったら、ライターもなんかちよつとかっこよく聞こえるかも知れない。

……ならまあ、いいか。

「魔王なら魔王らしく、なんか魔法作っとかなくちやなあ……」

もっとうこう、かっこよくて強い奴とかな！

などと考えていると、寝室全体に乾いた音が広がった。

「おはようございます、リョーガ様」

ドアを開けて入ってきたのは、金髪眼帯のメイド。
ナルフェルだった。

「ああ、おはようございます」

療牙も挨拶を返す。

なぜか敬語で返してしまったが。
そのナルフェルの後ろから、新たなメイドが二人がかりで豪華な箱を運んできた。
トン、という少し重量のある音と共に置かれたその箱には何が入っているのか。

「リョーガ様、今日はリョーガ様の戴冠式となっております。まあ、名前ばかりの即位式ですが」

ナルフェルは笑顔で言葉を紡ぐ。

なんか、眼帯少女の笑顔って、以外というかレアだなあ。

「と、ああはい。んで、その箱は？」

「これはリョーガ様の衣装でございます」

箱に手をかけながら、ナルフェルは言った。
質感のある、良質そうな木でできた、木箱。

ナルフェルがその蓋を持ち上げると、中には黒基調の、如何にも魔王ですよ的な服が折り畳まれていた。

というか。

「さながら、暗黒勢力だな……」

「魔王の象徴、闇の化身のようなものですからね」

取り出される服は、黒いファーというか羽毛つきのコートと、学ランみたいな形だが、それより長く、光沢のある、軍服みたいな上着。これまた軍服を思わせるズボンに、脛全体を被えそうな漆黒の皮のブーツ。長靴。

と、ナルフェルが急に顔を上げた。

「時にリョーガ様」

「ん、どうした？」

「ピアスの穴などは開いていますでしょうか？」

「ピアス？ 右だけ開けてあるけど」

「畏まりました」

そう言って取り出したのは、よくわからない形をした、黒色のピアス。

まるで耳の様な形の真ん中に、翡翠色の宝石か何かが埋め込まれて

いる。

「以上で全てになります」

「…………果てしなく厨二だなコノヤロウ」

「これが一応、リョーガ様の魔王としての正装になります。儀式や式典、外交の際のものになりますね」

「ということは、今から着てくのな？」

「はい。着替えに関しては、どうなさいますか？」

ナルフェルが聞いてくる内容は、恐らく。

「あー、一人でやるわ。なんか恥ずいし」

「畏まりました。では外で待機しておりますので」

ナルフェルは一礼をして、扉へ向かう。

背後のメイドさんもそれに倣った。

正直に言って、メイドさんたちに服を着せてもらうわけにはいかなかった。

恥ずかしいのも理由だが、なによりも、「服ぐらいは一人で着られる」という半ば当たり前な矜持が主な理由だった。

YYYYYY

さて、いざ着終わってみれば。

「なんだこの厨二衣装。確かに魔王っちゃあ魔王だがなあ……………」

姿見があつたので前へ立ってみればなんだこの格好、という感じである。

これじゃあどこぞの厨二主人公だなあ、などと銀髪オッドアイの高校生を思い浮かべながら、療牙は目の前に立つ“魔王”を見た。

威厳、ねえなあ……………」

なんというか、歴戦の猛者のな、上へ立つ者が纏うオーラのものが療牙には足りていない。

一言で、ひ弱そう、とも表現出来そうだ。

「ホントこんなんでいいんだろうか……………」

先程の決意が早速瓦解し始めていた。

どこか気怠げな表情の療牙なんとなく壁を見遣った。そこには、昨夜には気づかなかった掛け時計がある。

なんというか、“腹時計”云々がすごく間抜けだったと思い知らされた。

それも先程、ナルフェルによって。

彼女は時計とともに、

「式典は第8の刻ちようどから始まりますので、第7の半刻には部屋を出ましょう」

という、よくわかんない計画を立てていった。

多分だが、8時には式典を始めるから7時半には出ましよう的なことだと思う。

「分かり辛えからあとで変えさせよう………」

といって、部屋の扉に手をかけた。

Y Y Y Y Y Y

謁見の間。

魔王が座する玉座と、縦に長い空間で構成された、で一番大きい部屋。

厳かでならなくてはいけない、魔王の即位式が行われる場所にして、謁見をする間である。

その厳かな式を前にして、魔王の到着を待つ場内は、ざわめいていた。

専ら、新たに魔王となる、『リョーガ様』についての根も葉も無い噂、というか推測だろうが。

と、召喚士にして新たに魔王の補佐となるクウは思った。

昨日見た、漆黒の髪の少年。

自分がこれから一生尽くしていく主。

リョーガ・クジヨウという少年について、少し思案していたことを、再確認した。

（昨日謁見した際に、何故あそこまで落ち着かっていたのだろうか……）

別世界から突然転移させられ、訳が解らぬ内に魔王にさせられてもなお、リョーガは落ち着いていた。

自分なら絶対取り乱すだろう、とクウは思う。
だからこそ、ここまで早い即位式が出来るのだ。

不思議で仕方が無かった。

まあ、と置いて。

「常識に囚われていては、いけませんよね……」

魔王に仕える自分が、常識でモノを判断するなど、言語道断である。
そう言い聞かせ、よし、と呟いた時。

謁見室の重い扉から音がした。

来るのだ、新魔王が。

Y Y Y Y Y

謁見室の前の衛兵——恐らく亜人と呼ばれる種族だが——が、その扉を開こうとしているのを見ながら、ファー付きフードを被った燎牙は考える。

（歩いて玉座の前まで、か。なんだか緊張するなあ）

そもそも、式典の類というのは何もなくても緊張するものである。仕方ないと諦め、扉を見た。

亜人の衛兵ともう一人、人間のような見た目の種族の衛兵が扉を開けはじめていた。

あと数秒と経たぬ内に即位式が始まる。

フードを被ったまま——あるタイミングまで臣下に顔を見せないようにする工夫だ——歩くというのも、なかなか奇抜だよなとか考えている内に、扉は開いた。

厳かな、式典の空気。

ずらりと整列した、多種多様な種族の臣下。

そして、床より数段高い位置に鎮座する、玉座。

これが俺の世界。

これが俺の、新しい生活。

これが、現実。

その確認に、思わず笑みが零れた。

誰にともなく、療牙は呟いた。

さあ、行こうか――

療牙は歩き始めた。

扉を潜り、深紅の絨毯の敷かれた道の上へ、一步を踏み出した。
視線を感じる。

一つ、二つ、いや沢山。

それらは、療牙にとって重力にも等しい、威圧になる。
けして軽くはない、王への圧力。

だが、一步、また一步と前へ歩む。

そうして玉座への階段を上る。

僅か三段ばかりの階段だが、一段一段が恐ろしく長く感じる。

上りきると、そこには司祭のような格好の、人間に近い種族の高齢者がいた。

療牙はその眼前で立ち止まる。

それに合わせ、司祭服は語りだした。

「——かの異なる大地より出でしニンゲンの魂よ、我等が同胞によつて召喚されしニンゲンよ——」

司祭服は続けた。

「——この地に参加されし貴殿の運命さだめ、どうか聞き届けられんことをぞ願うばかりにございます——」

療牙が、いやリョーガが魔王になること。
それを示しているのだろう。

「——そして、我が国に恒久の平和が齎されんことをぞ願います。
さてニンゲンの貴方は、この地にて如何なさるお積りか、どうぞ教えてはくれぬだろうか」

問いが来た。

どうするのか。

否、どうしたらよいのか。

答えはこうだ。

「俺は、魔王になるつもりだ」

「おお、なんと。そうであったか」

演技とはいえ、迫真の演技。
年季が入っている。

「さすれば、我等が王として、この国を治めてはもらえぬだろうか」

「勿論だ、尽力しよう」

「――皆の衆、しかと聞き届けたか。この者は、今より魔王とされる者。我等が主なり」

その声に、ザッと足音がする。

振り向けば、足音の主たちは、こちらに向かって跪づいていた。

臣下の礼。

それが服従の証拠^{しるし}。

「では魔王様」

声に振り向くと、先程の司祭服はまだ立っていた。

「どうか玉座に御座り下さい。そして宣言してください」

療牙はその通りに、玉座へと座る。

その間に、司祭服は段を降りて臣下の礼をとる。

玉座に座りながら、療牙は考えた。

（魔王、か）

実際まだよくわかっていない。

魔王がどういうものか。

だが、決意はした。

元々、理解と諦めは早いほうだ。そうなるよう、育てられてきた。

四歳で父親母親が死んでから、田舎のクソ爺^{ジジ}イのもとで暮らしていたが、その頃なんかは、毎日が死と隣り合わせみたいなものだった。何せ、四歳の子供に向かって鉈を振り回すような爺^{ジジ}イだ。「修業の一つじゃ、刃物になれんかクソ坊主！」とかホントに洒落にもならない恐怖を毎日体験し、心だけは強くなつた。

別に今更あちらに戻りたいとか思うこともなかった。友達は沢山いたし、親友も、挨拶無しに失踪してしまったが、いた。だが、こちらに俺の存在意義があるなら。やるべきことは、やるべきだよな、と思うわけで。必然と覚悟は固まるのだった。

「今日から俺が魔王だ、よろしく頼む」

だから、燎牙は宣言した。

国を背負って立つに足る、ただ一言からなる言葉を。

Y Y Y Y Y Y

「えー、と。新しく魔王になった、リョーガ・クジヨウだ」

玉座から、下の臣下へと挨拶した。

即位式のあと、なぜか自己紹介タイムに入っていた。

え、こーゆーのって徐々に覚えるモンじゃねえの？ という療牙の疑問を他所に、自己紹介は進む。

「では儂から。儂は國務大臣を務めさせていただいておりますディアブロ・アールバレストと申します」

先程の司祭服が立ち上がり、一礼した。
見ると、ディアブロの耳は長い。

「ディアブロ、お前らも。俺は種族に詳しくないからさ、その所を教えてくださいかな」

「おお、これは失礼を。儂はハイエルフという種族にございます」

魔王を前にして「儂」なのだから、よほど肝が座っている。
ディアブロが座るとその横の、角を生やしたニンゲンみたいな種族が立った。

「私は参謀長で、二角鬼のジルウェ・オーゲンと申します。どうぞよろしく願います」

「角二本、ね。よろしく」

その次、その次と。

自己紹介タイムは過ぎていった。

（え、コレまさか臣下全員やんの!?!）

等と療牙がたじろいだのは、また別の話である。

Y
Y
Y
Y
Y
Y

その日珍しく起きていたのか、考えごとをしていた。

「ふむ、やはりあの時間の歪みは奴の仕業よのう」

なら、と重たい体を持ち上げた。

確認したくなるな。どれ、久しぶりに会いに行こうかと思った。

「それに、召喚されたニンゲンとやらも気になるし、の」

◆004◆厨二魔王と即位式（後書き）

えー、やっぱり難しいですねー。

何せ敬語がいまいちわからないので、いちいち調べるのは骨が折れますね。

でも頑張って行きますのでよろしくお願いします。

あ、感想などでここはこうだろとか言っていただければ幸いです。

では次回予告。

療「はいまた俺かよ！」

作「しかたないしかなたい。だって新キャラで会話できる奴まだいねえし」

療「あれは？ ナルフェルは？」

作「今洗濯してる」

療「なん……だと……！」

作「ま、サクッと諦めろ」

療「はあ、ま、いいや」

作「はははは」

療「さて、次回はー」

作「いよいよ魔王としての生活がスタート！の前に朝ごはん食べなきゃ！というわけでメシ喰います、そして倒れます！」

療「殺すな！」

作「次回、「一家に一台クッキングパパはいかが？」、お楽しみに！」

療「クッキングパパは人だろうがっ！」

◆005◆朝餉と座学とご挨拶（前書き）

二ヶ月ぶりぐらいですかね。

忙しくて全然書けなくてすいません（涙）

◆005◆朝餉と座学とご挨拶

ここは、アークレイド帝国、その王都であるラザスの中心部にある、ラザス城。

その一室で、この城の主とも呼べる存在が目の中の景色に、「うわあ」などと子供みたいに感動していた。

かなりの大きさを持つ王族専用の食堂の、縦に並ぶ白いテーブル。その上に置かれた自分の料理の豪華さと言えば、ラザス城の主――九条療牙であるが――が、およそ17年の人生を振り返っても見当たらないような凄いものであった。

様々な山海の幸を始め、どれも一級品ばかりなのだろう。

だろう、というのは、療牙自身はそんな凄まじく豪華な料理に出会ったことがないからである。

療牙はと言えば、この芸術品達を前に若干気が引けていた。どうにも自分と目の前の料理が釣り合わないとの考えだった。

かたや昨日までは何の変哲も無い凡人で、かたや生まれた時から一級品の料理である。

この療牙の考えには少し間違いがあるだろうがな、と指輪になった神様がぼやいた。

前回全くといっていいほど出番が無かったというか、何と言うか悔しかったのだった。

と、療牙に動きがあった。

横にいたナルフェルに、恐る恐る話し掛けた。

「…………ナルフェルさんや、これ全部俺のなの？」

「さん、はお辞め下さい。それらは全て、リョーガ様の料理ですよ」

もしや何か御不満がございましたか……………？ などと聞かれてしまい、「いや別に」などと慌てて返す。

「ただ、多くねえかなあって、思ってたさ」

「多い、ですか？」

「…………元々贅沢出来るような家庭に生まれたわけじゃねえしさ。量もそうだけど、豪華過ぎねえかな、って思ったただだから」

その一言に、ナルフェルが黙り込む。

どう返せば良いか、わからなくなったのだろうか。

そこへ、助け船の如く、脇に控えていたクウから声がかかった。

「つまりもっと質素な方がよい、と？」

そういうことですか？ と聞いてきた。

昨日の話では、このクウ・リーベルという少女は俺の補佐官的役職につくようだ。

尤も、前例のあまりない事態のため、役職名もともに決まっていような役職だが。

召喚で魔王を決めること事態、魔族の大陸、アークレイド帝国の存在する「オズライア大陸」では異例と呼べるらしい。

そもそもオズライア大陸の、他の大国は三つあるが、そのどれもが「魔王」という存在について否定気味なのだから。

魔族の王なので「魔王」なのは間違いないが、隣国の「ロゼル大公国」は公主だし、その隣国「リオルヴェル皇国」では皇帝と呼ばれているし、最北端の（アークレイド帝国は最南端に位置する）「ラズベィアス王国」なんかは、王国なのに「炎帝」などと呼ばれているようだ。

魔王という名詞が、どうも負のイメージを負うかららしいのだが、どうしたものか。

因みに、この話は全てディアブロから移動中に聞いた話である。

「んー、質素か。まあ近いんだけど、少し違うな」

核心を突かれかけて、内心ドキッとしたのはここだけの話だが、療牙としてはそれに近い感情を持っていた。

別に何も無駄に豪華にすることはない。

見た目の華やかさより、栄養価や味の方が大事である。

何より、高級品ばかりでは財政も心配である。

その旨を伝えと、ナルフェルは感心したのか、なるほどなるほどと何度も頷いている。

「つまり、料理の内容を充実させれば良いのですね？」

「ああ、理解が早くて助かるよ」

徹底した栄養価優先と儉約主義、こんなところにも日本人の性^{さが}が表れてきたかと笑う療牙。

一先ずやることがあるだろう、と心に語りかける声があったので、『そうだったな』と適当に返し、目の前を見る。

「さて、ではいただきますかね」

両手を合わせたのを見て、クウが首を傾げる。

「恐れながらリョーガ様、その動作には何か特別な意味があるので
すか？」

「ああ、これ？」

いただきます、の合掌を見てか疑問に思ったのだろう。

言語は同じでも、こういった伝統なんかは存在しないのだろうか。

「これには、感謝が込められているんだ」

「感謝、ですか？」

ナルフェルや他の給仕達も、一様に「そんなの聞いたことないぜ」
顔をしている。

「食材を食べるといえるのは、その食材の命を貰い受けること。だから、俺の居た世界ではそれに感謝して、手を合わせながら『いただきます』と、こう言うのさ」

こういうかんじでな、と手を合わせ、『いただきます』と言った。

その動作に納得した様子のクウを見て、療牙はスプーンとフォーク——ではなく箸へ手を伸ばした。

Y Y Y Y Y Y

「さてリョーガ様」

食事の後、療牙は自身の執務室へ案内された。

大きめの、どこぞの社長みたいな机。

古めかしくて重たそうな、広辞苑みたいな本が何百と並ぶ本棚。

開放感のある、大きな窓。

光の差し込んだその部屋を見て、療牙が「すげー」などと呟きながら机の椅子——なにやら高級そうで、座り心地が最高の椅子——に座ったところで、先程のようにクウに言われた。

「さて……さて？　さてどうするの？」

「今日は療牙様の仕事の紹介になりますね」

執務室に入った途端に補佐官——秘書らしいのか？——らしくなったクウ。

ともあれ、俺の仕事か。

「俺の仕事って、どんなことすんの？」

「はい、こちらの書類の確認をして、認可印を押していただく仕事です。所謂書類仕事ですね」

「俺はOLかよ」

OL？ と疑問符を浮かべるクウ。
まあ、知らないか。

「ああ、何でもない何でもない」

「……………それで、確認作業については初めのうちは私も手伝いますので」

国の情報なんかだと、療牙様の知らないことも多いでしょうし、とクウは笑った。

確かにそうだ。

来たばかりで、王城から出たことがないのが原因だが、俺はアークレイドについて何一つ知らなかった。

加えて、療牙はアークレイド帝国で、ひいてはこの世界で生きていくのに必要な、唯一の自分のスキルについて何も解ってはいない。出すだけなら魔法を出すことはしたが、あんな小さな魔法を使えたからといって、どうとなるわけでもない。

要は、もっと沢山魔法を使えなければならぬのだ。
部下や魔物に示しがつくように。

だから。

「…………あのさ、アークレイドのこととか、この世界の法則とかについてよく知らないからさ、そこんとこ教えてくれないかな？」

「はぁ、そうですか。…………なら」

俺の希望を受けて、一瞬迷ったように手元の手帳を見ていたが、やがて何かを書き込むと、こちらに向き直った。

「今日の仕事はそれに致しましょう」

パチン、と手帳が閉じる小気味よい音がする。

「まずは座学から始めましょうか、魔王様」

目の前に立つ補佐官兼秘書の顔は、なんだか嬉しそうだった。

Y Y Y Y Y Y

城の一角の、とある部屋。

召喚課の仕事場であるその部屋で、マリエルは自分の机に向かいながら退屈そうにしていた。

ここ最近、あれよあれよのうちに出世していったいる対象が居な

くなってしまったので、何やら手持ち無沙汰感満載で、非常につまらなかった。

机の消しゴムを指でくるくる回しながら、溜息。

「暇だなあ……………」

「そんなに暇なら追加で仕事をやらんでもないぞ?」

「そりゃないわあ……………って、ビリオール様!」?

唐突な声に、慌てて振り向くと、そこにはしかめつらがあった。どうやって言い訳しようか、などと考えている時点ですでに反省の意は無いが、とりあえず挨拶を。

「お、おはようございます課長……………」

「うむ、おはよう。にしても勤務態度が素晴らしく良いではないか、マリエル?」

「え、ええはい」

「机の上に消しゴムしか乗っくらんとはどういう仕事だたわけ!」

「すみません……………」

雷でも降らせるが如く怒られた。というか降っている。

まあ。

「でも、今日は働かなくてもよい日ですよ!？」

「お前が仕事をしに来たのが悪い」

「しっ、仕事をしに来たわけではなくてですねっ!」

その一言に、ビリオールの目が変わった。

「……………ほう、では何だ。お前は仕事場に遊びに来た、とても宣いたいわけか？」

頭に「怒」の文字を浮かべているように見え……………あ、浮かんでますね。

その顔は、「バカモン!」と叱りたい心中がありありとあらわれている。

だが、マリエルとて別にふざけて仕事場で仕事もせずに消しゴムくるくるをしていたわけではなかった。

「クウが居なくなっただんで、ちょっと寂しくなっただです。だから、ちょっと仕事場に……………」

「……………まあ、よからう」

眼前のビリオールが、懷に手を突っ込む。

取り出したのは、庶民的ながら実用性の高さで男性に人気のブランド、「レーヴ」の長財布。

中から紙幣を数枚抜き取ると、マリエルの頭にそれを押し付けた。

「今日はこれで飲みにも行ってこい。俺の奢りだ」

「え、私別に貧乏じゃないですよ？ 飲みに行くくらいのお金なら――」

「つべこべいうんじゃない。それが俺からの今日の仕事で、それは経費、そういうことだから」

踵を返し、ビリオールは部屋の扉に向かう。

いつもは「ハゲ」だの「デブ」だのさんざん悪いイメージを抱いていたが、今日だけはその後ろ姿が何だか眩しく見えた。

「課長！」

「……………なんだ？」

ビリオールは振り返らず問う。

なんだろうか、なんで今日はこの人こんなにカッコイイんだろうか。

「……………仕事、頑張ってきます！」

「……………ほどほどにしとけよ」

その台詞が、部屋中に何度も反響した。

Y Y Y Y Y Y

間に昼食を挟みながらの、4時間の座学を終えた療牙は、ラザス城内の練兵場に向かっていた。ぐったりしながら。

「…………座学、きついね」

高校では座学は毎日あったから大丈夫だろうと高をくくっていたが、流石に4時間はきつかったようだ。

主に世界情勢や種族、魔法の概念などから、はては城下の街の説明まで受けた。

とても4時間でおさまる内容ではなかったが、なんとか付け焼き刃程度には理解できた。

帝国軍の構成なんかを聞いている時思っていたが、自分の魔法の練習もしなくてはならなかった。

そう考え、夜間にでもこっそり練習できるような場所を探していると、どうやらもとの目的地でもあった、兵士の訓練場がよさそうだということだったので、現在向かっている途中だ。

「なあ、クゥ」

「はい、なんでしょうカリョーガ様」

そう答えたクゥは、療牙の右斜め前で、先導してくれている。流石に二日目では、城の中の配置などを覚えられるはずがなく、迷子になるので、案内して貰っていた。

「確か、うちの軍の構成は、一般兵、重装兵、騎兵、魔導兵、救護兵と、それらを統括しながら自ら動く騎士団と、独立した部隊で動く竜操兵、だっけか？」

「ほぼ正解ですが、近衛騎士が抜けてますよ」

「ああ、俺の身边を警護する騎士か。俺はそいつらをちっとも見ていないんだが？」

近衛といいながら、王が知らなくてはあまり意味がない気がする。知らなければ、誰が敵なのかわからない。

「ああ、近衛隊なら多分その辺で見えますよ。後日にお披露目式だかなんだかがございまして、リョーガ様はその式で対面するということになっておりました」

なんだかって何だよなんだかって。そこら辺はもう少し詳しく聞きたいし、そもそも自分の身を護るものが誰だかわからないのはまずい。

のだが。

「さて、ここが練兵場になります。まあ、ここで練習するのは一般兵や重装兵ばかりですが」

どうやら練兵場についたようだ。

城の東部分に作られたその場所では、多くの兵士が手に剣や槍を構えて訓練していた。

やはり剣と槍が主流なのか。どこぞのファンタジーではないが、魔

力で撃つ銃なんかもあるのだろうか。

「へえ、広いな」

結構広い。

どれくらいかと聞かれれば、野球のグラウンドより多少大きいくらいといしか言えないが、それでも広く感じる。

療牙はしばらくぼーとしながらその訓練の様子を見ていたのだが、不意に誰かがクウに気づいたらしく、やがて訓練の責任者が近づいてきた。

「これはこれはリーベル様。ここの責任者の、マジヨラル・サイクノといいます。今日はいかがなさいましたか？」

「……マジヨラル、といいましたか」

「はっ！」

「あなたは今日、戴冠式に参加しましたか？」

「いえ、自分はここを任されておりましたので、ずっと練兵をしておりました故参加いたしませんでした」

「………なら伝えておくわ。隣のお方が、新たな魔王様のリョーガ・クジヨウ様よ」

「…………ツ！？」

相当慌てたらしく、飛び上がって真っ青な顔になりながら、すぐさ

まこちらに向き直り、跪づいた。

「もっ、申し訳ございませんでした陛下ッ！！　どんな処罰でも受けますので、どうか妻だけはお許し下さいッ！！」

「???」

マジヨラルという責任者がどうして土下座しているかがよくわからず、療牙は思わず狼狽えた。

「処罰？　妻？　なんでお前を処罰しなきゃいけないんだ？」

「？」

「別に戴冠式来てないなら俺のことは知らないだろ。なのに何故処罰しなきゃいけないんだ？」

想定外の発言に思わず顔を上げたマジヨラルに対して、療牙はその目線に合わせるようにしゃがみ込んだ。

「大体、そんなに妻のことを大事に思ってる奴なんか、罰せるかよ」

笑いながら、その肩を叩いてやる。

事情を知らないのにいきなり罰せられて、そんなのいいわけがない。

大体、自分の都合でここへ来たのだから、相手に合わせるのが普通だ。

魔王という立場上、それはあまり通用しないかも知れないが、などと心で零した。

Y Y Y Y Y Y

冷たい石の敷き詰められた牢。
その中に、鎖に繋がれた少女がいた。

体中傷だらけで、着ている服は原形をとどめない程に裂けていて、
恐らく美しい金色をしていたであろう長い髪は、薄汚れてやや黒っ
ぽくなっている。

鎖で両手を壁に繋がれた少女は、虚ろな目で、その眼前の檻を見て
いた。

やがて、裂けて出血している唇が開き、言葉が紡がれた。

「誰、か……………」

◆005◆朝餉と座学とご挨拶（後書き）

朝から山海の幸なんか出されたら、胃が縮小してしまいそうな日本式胃袋の療牙君でした（笑）

◆006◆在らざる魔法と悪意

ラザス城の東に位置する、練兵場。

その隅に腰を下ろして、燎牙は練兵の様子を見ていたのだが、何と言えはいいのか。

「……………ありゃあ、素人だらけじゃねえか」

弱い、などというものではない。あれでは肉屋が戦ったほうが強いのではないだろうか、それほど戦い方がなっていない。

剣の握り方、根本的な立ち方、重心など、見直すどころか一からやり直して欲しいポイント満載感謝祭だった。

クソ爺ィに殺されかけてただけあって、燎牙は一通りの武器は扱える。刀や槍から、銃やボウガンまで様々だ。

流石に両刃剣の扱い方は習っていないが、基本的なことぐらいは理解しているつもりだ。

「仕方がありませんよ。あの兵士達は、もとは農夫や学生ですから」

兵士の中でも、歩兵だけは一般人で構成されている。

だが、別に徴兵などがあるわけではなく、全て志願制になっており、その為学生でも一般兵として働けるのだ。

最も、歩兵最大の武器は「人海戦術」なので、数が大事なのではあるが。

「ふーん……………」

もう少しどうにかならないものか、とは思うが、やはり仕方がないのだろうか。

『そうだな。指南役を増やせばよいのではないか？』

「ツ……『……………あつぶねえ、普通に反応するところだった』

エセ神様の声が聞こえてきて、思わず焦りかけた。
彼は続ける。

『一人が何百人を指揮するのは、なかなか厳しいものがある。それこそ、小さなフライパンで10人分の炒飯を同時に作ろうとすると、熱が伝わりにくく溢れやすいのとおなじでな』

何がどう同じなのか、見事にわからん説明をありがとう。
まあつまり、複数で教えたほうがいいってことだろう。

誰か教えられる奴で、暇な奴がいればよいのだが、そんな都合よくはいかないだろう。

「……………また、考えとくよ」

「はい？」

療牙の呟きに、後ろのクウが反応した。「なんでもない、なんでもない」と苦笑すると、立ち上がる。

次は騎士団でも見ておこうか、と思い、クウに尋ねた。

「クウ、騎士団の連中とかはどこで訓練してるんだ？」

「騎士団ですか？ 城の西側に本部があるのでそちらかと」

「案内してくれるか？」

「はい、わかりました」

西側の騎士団の様子を見に行こうと振り返り、威勢だけはいい歩兵たちの声を背中に受けながらその場を後にした。

騎士団本部は、小さな砦のようになっている。

城の西の門を潜り、目の前に現れる建物が騎士団本部だ。

中央の建物を中心に、訓練用のグラウンドや宿舎などがあり、広いイメージを抱く。

グラウンドでは甲冑を着た騎士たちがそれぞれ剣や槍や斧など、各々の武器を振るったり、的に火炎や水流の魔法を当てたりしている。ところで他の隊はどうしたのかというと、歩兵含め騎士団より下の兵は統括して「アークレイド帝国軍」となるらしく、東の門の先に本部があるらしい。

一カ所にしなかった理由は、大規模魔法などで一度に全滅しないよ

うに、とのことだがあまり意味がない気がする。

「しかしまたこれは大きいな」

「ええ、一応騎士団には貴族の御子息なども多いので、支援などが集まりやすいんです」

とりあえず入口から入り、グラウンドまで近づくと、誰かが気づいたのか、またしても責任者っぽいのが近づいてきて、跪づいた。

「これは陛下、いかがなさいましたか？」

今度は騎士団だからなのか、療牙がどういう存在か、把握しているようだった。

「リョーガ様、こちらは騎士団上級二等騎士のゾーアル・マクシミリアンです」

「ゾーアルか」

「はっ」

療牙の呟きに、ゾーアルは跪づきを強めた。

「今日は訓練を見に来ただけだ、楽にしてくれて構わない」

「左様ですか。ならば、席を設けさせましょう」

それと模擬戦なども御覧になれますか？ などと提案され、療牙は首肯した。

ゾーアルが何かを叫びながら、騎士団員たちの元へ向かうのを見ながら、ふと疑問を抱いた療牙は、クウを呼んだ。

「クウ、ちょっといいか？」

「はい、どういたしました？」

「そういえば、マジヨラルとかゾーアルの種族ってなんだ？ お前は確かハイエルフ………だったよな？」

「はい、そうですね。………確か彼らはデーモンではなかったでしょう。その辺はご説明していませんでしたね」

では、と、クウは療牙に向き直る。

「………オズライア大陸における、魔族達の区分けとしては、上級と下級という区分けが出来ます」

下級は普通の魔物として、魔族文明を持つ上級の者達に狩られる。種族が同じでも、下級か上級かで見た目も変わり、下級は言葉を理解する知能を持たない。

上級は人間を模した見た目の者が多く、さらにそのほとんどは人間と見た目があまり変わらない、という。

「まあ、例外としては、ドラグネスなどの竜人種や、ラットマンなどの小獣種などが当て嵌まります」

「ラットマン、なんていたか城に？」

「いえ、ラットマン達は大体鉾山関係の仕事に就くのが一般的です。コボルドやドワーフなんかも同じですね」

「ふうん」

そんなプチ講義の合間にも、燎牙の席は急ピッチで作られていった。

「席なんか要らんのに……」

先程の練兵場でのことを思い出し、苦笑しながら歩きだした。

結果から言えば、騎士団と歩兵ではやはりレベルが違った。

歩兵が剣を一振りする間に、彼らは二振りも三振りもしそうなほど剣術に長けていて、一部には魔法も併用しながら戦うものもいた。その、魔法を集中的に見ていたのたのだが。

『なあエセ神様』

『なんだ？』

『アレ発動遅くね？ 何の魔法か見切られる気がするんだが』

いくら騎士団とはいえ、空中に魔力を用いて魔法陣を描いて、呪文の詠唱をして発動させて、というプロセスに、しっかり5秒もかかってしまっている。

あれでは魔法を予測されてしまい、結果当たらない気がする。

『仕方がないことではあるが、な。あれでもかなり早いほう、燎牙の構築スピードが気違いなだけでな』

『……………そうか、そんなモンか』

そんなやり取りがあって、今燎牙は練兵場にいた。

真夜中の0時だ。

『……………とはいえ、どうするかな』

自分の魔法と言われると、やはり既存の魔法にはないものを考えるのだが、実現させると城壁ごと壊しかねないものばかり思い付いてしまう。

かといって威力を弱めたものを考えると、どうしても既存の魔法に近いものになってしまう。

一応、既存の魔法にはルールがあって、系統や上中下級が分けられていたりする。

炎、水、土、雷の四大元素を基本とした属性魔法と、それらのどれ

にも属さない、一部の攻撃や回復、補助などの無属性魔法がある。

これらを踏まえて、考えなければならぬため、どうしてもパワーバランスが取りづらくなっていた。

『……………なら防御から考えてはどうだ？ 的が要らない分、楽にできるだろう』

神様が提案をくれた。

『防御ねえ……………。まあ、防御はすでに考えてはあるんだけどな』

『ほう、では被攻撃用の案山子を用意してやろう』

神様がそういうと、前方5メートルほどに黒い案山子が出現した。顔はやはり「へへのへのもへじ」である。

『そいつは起動させると、下級の火炎魔法、「ファイアボール」を打ち出す。準備はいいか？』

『ちょっと待てよ。今から詠唱するか……………ら……………!？』

療牙は防御の準備をしようと、両手を前にだして、そしてその変化に気づいた。

『……………ふむ、そうか。暗黒ダークマターの力はそれだったのだな』

神様が、長年解けなかった謎が解けたときのように納得をした。

療牙の両手の甲に、黒く光る紋章が浮き出していた。両刃の剣を取り巻く、二つの炎の柱の紋章——アークレイド帝国の紋章である。

『療牙よ、聞くがよい。それが恐らく暗黒ダークマターの真の力だ』

『これが、あのよくわからない力の正体………？』

『そうだ。それがあれば、名前をイメージするだけで、無詠唱で魔法陣を構築できるし、右左で別々の魔法を発動できる。あと、自分の付近でなくとも魔法陣が構築できるようになる』

『………よくわかんないけど便利になったな、俺』

チートも極めたら無茶苦茶になるなやっぱり、などと自分にしか通用しない軽口を叩く。

実際、無茶苦茶な能力なのは間違いないだろう。

無詠唱で、左右別々に魔法が発動できて、さらに設置も可能。もはや、どこぞの幻想殺しも逃げ出す強さである。

「…………ふう」

『それで、準備は出来たか？』

「今からやる、よっ！」

突き出していた右手で、自分の下に魔法陣を構築した。一瞬であった。

「ホントに早いな、こりゃ」

『では発動するぞ。……ファイアボール！』

神様から詠唱すると同時に、前方の案山子からバスケットボール程の火球が、こちらに向かって発射されて――

療牙の前30センチで、まるで見えない障壁にぶつかったように掻き消された。

『ほう、なるほど。自動防御か』

『ああ、名付けて「オートプロテクション自動障壁」だな』

自動障壁――魔法陣の範囲外からの攻撃を通さない絶対的な防御。特別にオーラとかが出るわけではないので、こっそり構築しておけばばれないだろう。

「これで防御は万全だな」

『では、後は攻撃魔法や補助魔法だな』

こうして、療牙の異世界生活二日目の夜は更けていく。

Y Y Y Y Y Y

次の日、朝食（要求通りの食事になっていた）を終え、執務室に戻り、早速仕事を始めた。

ハンコを捺すだけとはいえ、内容にはなかなか難しいものが多く、なかには一時間近く悩ませるような、頭の痛くなる書類もあったので、昼食の時間になっても療牙が片付けられた書類は20枚もなかった。

溜め息をつきながら立ち上がる療牙に、「初めてにしては随分と早いですよ、大丈夫です！」などとクウがフォローした。

昼食の席で、療牙は目の前の肉を切り分けながら、あらかじめ呼んでおいたディアブロの地理の講義を聞いていた。

「――で、ラザス城の背後、北側に位置する山脈が「ベーヴアル山脈」じゃ。標高2500メートルを越す大山脈で、アークレイド帝国を護る最強の盾でもある、重要な山じゃな」

ディアブロは何やら分厚い本、もとい地理書を片手にしゃべっている。

彼の話通りだと、ベーヴアル山脈は自然の要塞みたいなものだろう。2500メートルだとかかなりの標高だし、越えるだけで一苦労だ。

「じゃが、最強の盾とはいえ越える手段はある。それも、最悪の手段がな」

このラザス城において、今現在で療牙にタメ口を利けるのは、ディアブロしかない。

他の人（ニンゲンではないが、魔人だから人扱いなのだ）がそんなことをしようものなら、たちまちに処刑されそうになるらしいのだが、どうもこのディアブロという老練の神官には誰も口だしはしないようだ。

「最悪の、手段？」

ご飯を口に運びながら問う。

城で出される米は、なにかが日本米と違うようで新鮮だったのだが、こちらの米にはどうも甘味が足りないようだ。

某ホームレスの「味の向こう側」に辿り着けないのは少し残念だが、米が食えるからよしにしてある。

自分の中だけで、だが。

「それは、機竜団じゃ」

「機竜団？」

機竜なんて、某東京を荒らして帰る怪獣映画の、偽怪獣的口ボ位しか思い付かない。

が、まあそういうことではないだろう。

「カンタンに言えば、「竜騎士だけで構成される騎士団」のことで、一度攻めてくれば、千の竜騎士が舞い降りるとされている。じゃが、我が国は未だに機竜団を結成したことはないのじゃ」

「つまり、見たことがない、ってことか」

鷹揚に頷くディアブロ。

どうやら正しかったようだ。

その後、講義は療牙の昼食が終わるまで続き、ディアブロは「地理を教えるのは楽しいのう！」などと笑いながら部屋を出ていった。

その扉が閉まる寸前、療牙は偶然耳にした。

「そういえば最近、ウェレイザ地方の領主と連絡が取れんのじゃが、どうしたんじやろうか……………」

そんな生活を三日ほど続けた、ある日の午後。

いい加減城にも慣れてきて、どうにか迷わなくなった療牙は、やることがない暇人みたいに城の外をふらふらしていた。

というかその日の仕事は片付いたので、散歩をしていただけだが。

西側でマジョラルにヘコヘコされつつ、城門がある南側へ歩いていく。

「城には慣れましたか、リョーガ様？」

「んー、そうだな。初めよりか随分マシだなあ」

初めも何も、まだ一週間も経ってないが、と笑う。

最初の頃は、トイレの位置がわからず危うく漏らしかけたりもしたが（ちびりはしなかった）、それも今ではいい思い出だ。

……六日目にして思い出とはいささか早過ぎる気もするが。

「はは、危うく漏らしかけたりもしましたよね」

うわ言いやがったぞこの女。

クウはこの三日間で、俺に「一歩間違えば侮辱罪で死刑になってもおかしくない」程度の冗談を言うようになっていた。

だが、日本にいたところは割とよくあったからか、俺も「ははは、バカヤロウ」と返したりしていい感じにコミュニケーション出来ていた。

まあ、酷いことには変わらないが。

「…………お前ホント言うようになったな」

「お褒めにあずかり光栄至極」

「褒めてねえっての、全く……………」

そんな会話してる内に門まで来ていた。

門にいる兵士からは、「ま、魔王様がいらっしゃったぞ!!」「どうなさったんだろうか?」「また抜け出そうとしたのをリーベル様に捕まったのでは?」などと聞こえてきた。

実は、昨日こっそり城下でも見に行こうかと抜け出そうとしたのだが、門を抜けるところで仁王立ちのクウに見つかり、「さあ仕事ですよりヨーガ様!」と、執務室まで連れ戻されたりしたことがあった。

おのれ兵士共…………、と思ったりはしなかったが、流石にムツとした療牙は、とりあえず「仕事せんか馬鹿者ッ!」と叱っておくことにした。

そんな時。

城から伝令の兵士が小走りに、療牙たちに近づいてきた。

「陛下! ウェレイザ地方からの緊急要請が届いております!」

「ウェレイザ地方？」

この報せが、後に語り継がれる伝説の幕開けになることを、まだ誰も知らなかった。

◆006◆在らざる魔法と悪意（後書き）

はい、駄作過ぎますね（笑）

ー解説ー

オートプロテクション
「自動障壁」

◆療牙がマトモに作った、最初の魔法。魔力に比例した強度の障壁を、魔法陣にそって発生させる。魔力がほぼ無限な療牙が使うと、さながら「絶対防御」になる。

「ファイアボール」

◆下級の火炎魔法で、比較的カンタンな魔法。魔術師が「マジックミサイル」の次に覚える、所謂「初心者向け魔法」。火の玉を飛ばす。

YYYYYYYY

療「はい、次回予告でえーす」

神「…………どうやら作者は、リア友に「あとがき楽しんどるだろ？」と聞かれたらしいぞ？」

療「俺のせいではないな（笑）」

作「tk療牙の一言目マジたるそうww」

神「おい作者。仮にも作家を目指すお前がW W↑とか使っているのか!？」

作「だってのはが〇いの人よく使うし」

神「あれは例外だろうが……!」

クウ「あれ、みなさんお揃いですか？」

作「あ、クウだ」

療「新キャラはお前か、よかったマトモなヤツが来て」

作「自分を棚にあげたな今……」

ク「はい、よろしくっ!」

神「……原作では我輩は療牙以外には見えない設定だよな？」

ク「いーじゃないですかそんなこと! あなただんだんモブってきてますし!」

療「……あれ、こんなキャラだっけ？」

作「え、えー、そんなわけで次回もお楽しみにっ!」

ク「療牙様この前寝言で——」

療「だあぁッ、それを言うんじゃないッ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1047w/>

飛ばされ魔王のデタラメな毎日

2011年11月30日22時51分発行